

# 日韓市民ネットワーク・なごや

会報 No.54  
2011-3-13

일한 시민 네트워크 · 나고야

Home Page : <http://www.nikkannet.jp/>

発行者：後藤 和晃  
〒483-8037 愛知県江南市勝佐町東郷 238  
TEL/FAX 0587-56-6788

目次	1. 事務局通信	統括幹事：後藤和晃
	2. 会の活動	事務局
	3. おしらせ	事務局
	4. 会員の広場	新羅残影紀行の感想文
	5. ソウル便り	坂野慎治
	6. 会員の広場	黄金の新羅俳句の部

## 사무국통신 事務局通信

友情の絆をより強めたい！  
～ 日韓市民交流の夕べから ～

事務局 統括幹事：後藤和晃

この1月16日、久しぶりに会員同志の交流を図ろうと、交流の集いを名古屋駅前のイタリア料理店で開催しました。当日は「夕方から大雪が降る！」という天候だったのですが、交流の夕べは大いに盛り上がりました。この日の様子を、簡単に報告しておきましょう。

まず第1点は、大雪という天気予報のため、高齢者や遠方の会員など出席予定の方々が10数人も欠席された一方、最終的には52人という数多い学生・市民の方々が顔を見せ、交流の花が見事に咲いたことです。

韓国側からも顧問となっていていただいている鄭煥麒（チョン・ファンギ）琥珀会長や民団の前副団長の成功（ソン・ゴン）さん、尹大辰前韓国学校長、それに春日井市在住の実業家、鄭禧昇（チョン・ヒスン）さん、経友会の元の事務局長 金龍鐘さん等々在日の皆さんから留学生たちも出席し、日本人会員との間で和やかな対話が交わされました。

報告したい第2点は、全くの偶然だったのですが、この日が鄭煥麒さんの満87歳の誕生日に当たっており、会からささやかですが花束を贈呈することができたということです。ご存知の通り、鄭煥麒さんは名古屋韓国学校の創建に係わり、今も名誉理事長の立場にある方で、私たちの会の創立以来、韓国学校を遠慮なく使えるよう便宜を図って来ていただいています。その恩義に報いることはとてもできませんが、ささやかな花束にご長寿を願う気持ちをこめてお贈りしました。

さて、報告の3点目ですが、集いの冒頭の挨拶の中で、「韓流ブームが起きていると言っても、まだ、私たちのような会が存



在し続ける必要があるのでは！」と皆さんに申し上げました。ここで要旨を再録し、欠席された皆さんに理解を求めたいと思います。私は次のように挨拶しました。

「会が発足した 1998 年 2 月の時点では、日本と韓国の間には、かなり距離がありました。しかし、ドラマ“冬のソナタ”に始まった第 1 次韓流ブーム、そして去年あたりから K ポップの魅力で起こった、第 2 次韓流ブームで、日韓は限りなく近づいたように見えます。しかしそうした韓流ブームは表面的なもので、日本人は本当に韓国人に心を開いているのか疑問に思っている女子留学生が今日、この席に出席しています。彼女「キム・チソン」さんは釜山から名古屋大学に留学し、間もなく帰国しますが、先日、国際センターで開催された「韓国語で話そう、日本語で話そう・第 1 回愛知大会」の日本語スピーチ部門で日本人の和について発表しました。彼女は其中で、和の心を大切にしているという日本に憧れて留学してきたが、日本人の和の心は、日本人同志の間にしか存在せず、外国人は和の仲間の対象外になっていると訴えたのです。彼女がいかに日本人学生たちに打ち解けよ

うと努力しても、いつまでたっても部外者とししか扱ってくれなかったといいます。

実は私たちは、会を発足させた 13 年前にも金城学院の韓国人留学生から同じような訴えを聞いたことがあります。13 年の歳月の間に韓流ブームが燃え上がり、韓国への関心がかつてとは比較にならないほど大きくなっていることは確かですが、スターでも歌手でもない韓国の若者を、友人として仲間の輪の中に気軽に迎え入れる時代は、まだ来ていないようなのです。そうした時代を招きよせるためには、私たちの会もまだまだ地道な努力をしていきたいと思えます。ありがとうございました」と。

キム・チソンさんは、この夜、始めて“日本人の和”の中に解けこむことができたと喜んでいました。しかし彼女はたまたま勇気をふるって「日本語で話そう」に出場し自分の本音を語りましたが、恐らく自分の本音を胸に秘めたまま帰国してゆく「キム・チソン」さんが今でも何十人、何百人といるのではないかと思わざるを得ません。2011 年度も留学生の皆さんと過ごす機会を設けようと思いますので、会員の皆さんの参加を心からお願いしておきます。



## 会の活動

- 話してみよう韓国語・日本語 第 1 回愛知大会
- 豪雪の中、“黄金の新羅残影紀行”無事終了

### (1) 話してみよう韓国語・日本語 第 1 回愛知大会

この大会は友好団体であるハムケとともに高校生平和特派員実行委員会OBと合同で実行委員会を構成し、1 月 8 日（土）名古屋国際センターで実施しました。コンテストは、①韓国語スキット、②韓国語ノレバン・日本語カラオケ、③日本語エッセイ、④日本語スピーチ、⑤韓国語スピーチ、の各部門に 30 人の出場者が挑戦する内容でした。

初めての大会でしたが、ハムケのメンバーが要所要所を担当し、大きな波乱もなく無事、終了しました。これまで韓国語スピーチの大会は名古屋韓国学校で生徒を対象にしたものがあつたのですが、韓国学校以外で学んでいる人たちにも門戸を開いたという意義があるイベントになりました。

なお、大会の実行委員長はハムケOBで私たちの会の学生代表でもある鈴木健介君が見事に勤め上げたことを報告しておきます。



## (2) 豪雪の中、“黄金の新羅残影紀行”無事終了

2月13日(日)から17日(木)までの5日間、日韓交流史講座の第3シリーズ“黄金の新羅”の現地紀行を行いました。参加者は26人。現地解説は伽耶紀行でもお世話になった慶北大学の朴天秀教授でした。今回の紀行は、韓国でも50年ぶりという大雪に見舞われましたが、朴教授の判断で柔軟にスケジュールを変更しながら旅行を続け、ほとんどの重要な遺跡を廻り遂げることができました。降り続く雪のため、遺跡の周辺に30センチから50センチも積雪している状況だったので、市場で長靴5足を購入、雪踏み隊を結成して道をつけました。雪踏み隊の皆さんには大変ご苦勞をかけたが、おかげで雪で化粧された美しい遺跡が堪能でき、記憶に残る紀行となりました。

### 黄金の新羅残影紀行

2010-2012 韓国訪問の年 記念  
VISIT KOREA YEAR

主催：日韓交流史フォーラム  
協賛：韓国観光公社名古屋支社  
後援：名古屋国際センター

No	月日	都市	交通	時間	主要旅程	食事
1	2011年 2/13 (日)	名古屋	KE754 専用車	13:20	セントレア空港 旅客ターミナルビル3階 国際線出発ロビー チェックインカウンターA(大韓航空) 横の待合所 集合	朝( × )
		金海		15:10	セントレア空港発	昼( 機内軽食 )
		大邱		16:50	金海国際空港着	
				17:15	空港発 ~ 高速経由にて 大邱へ	
				19:00	水崎林太郎翁が完成させた農業用水池・寿城池見学 夕食(吉兆にて徐彰教・韓日親善交流会長と交流)	夜( 韓定食 )
宿泊：寿城観光ホテル 大邱市寿城区斗山洞 888-2 TEL 053-763-7311						
2	2/14 (月)	大邱	専用車	7:00	朝食 ホテル1F グリーンヒルにて	朝( ホテル )
		慶州		9:30	ホテル発 (積雪の為、遅延) 慶北大学校・朴天秀教授による解説 ①大陵苑(北部) ② 瞻星台 ③路東・西洞古墳群	サンボ・サンパフ 昼( サンパフ )
				13:00	昼食	054-741-4384
				14:00	④武烈王陵 ⑤芬皇寺 ⑥四面石仏 ⑦神文王陵 ⑧聖徳王陵 ⑨方形墳(車窓)	夜( キムチ鍋とチヂミ )
					夕食 ホテル2F 鶏林にて	
宿泊：慶州 コーロンホテル 慶州市馬洞 111-1 TEL 054-746-9001						
3	2/15 (火)	慶州	専用車	7:00	朝食 ホテル3F パノラマレストランにて	朝( ホテル )
		浦項		10:00	ホテル発 (積雪による道路渋滞の為、遅延) ①掛陵 ②方形墳 ③陵旨塔 ④慶州博物館	昼( 豆腐チゲ )
				14:00	昼食 (積雪による営業停止の為、レストラン変更)	現代刺身店
				15:00	⑤狹陵 ⑥三陵 ⑦三体石仏 ⑧五陵	夜( 海鮮料理 )
				17:00	⑨真平王陵 ⑩憲徳王陵 19:00 ホテル着	054-273-6388
					夕食 レストランにて	
宿泊：浦項 ホテルピロス 浦項市北区竹島洞 198-2 TEL 054-250-2000						
4	2/16 (水)	浦項	専用車	7:00	朝食 ホテルにて	朝( ホテル )
		安康		8:15	ホテル発 ①興徳王陵 ②淨恵寺十三層石塔 ③兄山江(車窓)	ロータリーヘジャンク 昼(コナムルクッパ)
		慶州		13:15	昼食	054-745-6669
		蔚山		14:15	④善徳王陵 ⑤仏国寺 16:10 朴教授とお別れ	月見の丘
		海雲台		20:00	⑥関門城(車窓) 19:00 ホテル着 夕食 レストランにて	夜(加ピ・石焼ビビンガ)
宿泊：海雲台センタムホテル 釜山海雲台区佑2洞 1505 TEL 051-720-9000						
5	2/17 (木)	海雲台	専用車	7:00	朝食 ホテルにて	朝( ホテル )
		釜山		8:15	ホテル発 ~ 文祿慶長の役の遺跡見学 ①釜山本城跡 ②月洞村	昼( 機内軽食 )
		金海		10:40	金海空港着	
		名古屋	KE753	12:45	金海国際空港発	
				14:10	セントレア空港着 入国後 集合の後、解散	夜( × )



## お知らせ

- 第14回総会を実施します
- 2011年度の会費をお願いします。
- 日韓交流史新講座のお知らせ。
- 会員の本の出版のお知らせ

### (1) 第14回総会を実施します

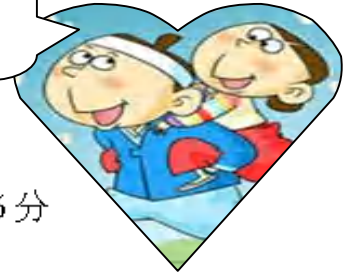
日時 2011年3月20日(日) 11:00~

会場 名古屋国際センター3階第2研修室

※地下鉄桜通線国際センター駅下車

※JR・名鉄・近鉄名古屋駅から地下街歩いて約15分

会員の皆さん  
ぜひ参加して  
ください・・・ネ



- ◎当日は10時50分まで、第2研修室で日韓交流史講座が開かれています。講座を受けていない皆さんは、10時50分から11時の間に部屋にお入りいただくようお願いします。
- ◎この1年間に新しく入会された皆さんは、できるだけ総会にご出席されるようお願いいたします。簡単に自己紹介をしていただきます。

### (2) 2011年度の会費をお願いします。

新旧の会員の皆さんに例年通り、下記により会費の振込みをお願いします。

年間会費 一般成人 4,000円 学生 2,000円

納入方法

同封する振替用紙に住所氏名記載の上、郵便局から振り込んでください。

振替用紙を無くされた方は、次の口座番号をお願いします。

加入者名 日韓市民ネットワーク・なごや

口座番号 00830 4 36485



### (3) 日韓交流史新講座のお知らせ

4月から半年間にわたって交流史講座の第4シリーズとして“文明の十字路口 海峡の島々”を展開します。韓半島を指呼の間に見える対馬・壱岐など海峡の島々には日韓交流の歴史を物語る様々な遺跡や伝承、そして特異な信仰などが伝えられています。

海峡の島々の歴史を深く掘り下げると共に、日韓交流史研究の第一人者の解説による現地紀行を行います。



NO	日程・場所	開始時間	講義内容	講師
1	4月17日(日) 2研・3F	10:00～	地理で見る 対馬・壱岐・北九州	日比谷高校 武井一氏
2	5月21日(土) 1研・3F	15:00～	海峡を渡った弥生文化 ～原三国の集落と弥生の集落～	九州大学教授 武末純一氏
3	5月22日(日) 2研・3F	10:00～	古墳時代以後の遺跡	九州大学教授 武末純一氏
4	6月19日(日) 2研・3F	10:00～	海峡の島の宗教世界	奈良県立図書館 情報館長 千田稔氏
5	7月17日(日) 2研・3F	10:00～	倭冠 <sup>はし</sup> 奔る海峡	名古屋大学教授 高松公明氏
6	9月27日(火)～30日(金)		文明の十字路 海峡の島々紀行 ～対馬・壱岐・北九州～	九州歴史資料館館長 西谷正氏

#### (4) 名誉顧問鄭煥麒氏の新刊本紹介



随筆 「四季彩々」 2010年12月15日発行

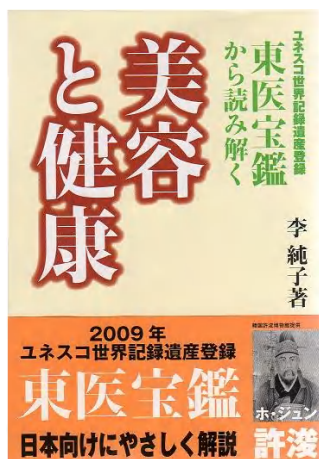
月刊誌「KOREA TODAY」(日本語版)に2005年から2010年の5年間にわたり連載された鄭煥麒氏の「特別寄稿」を編集、年代順に収録されたものです。

民族、政治、経済、社会(世相)から文化、人生観、さらには自然に至る幅広い分野にわたり、日韓対比を軸に独自の視点で綴った「思いやり」のエッセイ集。徳・教養と豊富な人生経験に裏打ちされた箴言、辛口で熱く、そして時には軽妙なタッチでウィットをまじえながら語り、問いかける「在日」のバイエルともいえる書です。



鄭煥麒名誉顧問

#### (5) 会員李純子さんの本を紹介



東医宝鑑から読み解く「美容と健康」

2010年11月14日発行

韓国家庭料理店を営みながら宮廷料理を勉強し NPO 法人日本フードコーディネーター協会会員としても活躍。

「東医宝鑑」をわかりやすく解説した本を探したが見つからず、シン・ゼヨン著作を参考にしながら、日本での日常生活や手に入りやすい食材を考慮し、実際に試しながらまとめた本です。健康で美しく長生きでき、楽しい日々を送る一助になることを願ってやみません。



## 新羅残影紀行 参加者の感想文

### 黄金と白銀の慶州路・・・伊藤義郎

「今回はスリリングな旅になりそうですね」。朴天秀教授はバスの中で待っていた我々に乗り込んでこられるや、つぶやくように云われた。普通だったら家からホテルまで二・三十分で着くのに、前日夜から降り積もった雪のため、二時間近くかかったとの事。朴教授はさぞうんざりされた事かと思うが、そんな素振りとは全く見せず、「さあ行くぞ！」と張り切っておられる様子に、この大雪でこれから先、旅はどうなるのだろうと不安やら心配していた我々に少し明るさが戻った。

バスは水崎林太郎が命を張って造ったと云う農業用貯水池を車窓から見て、大邱の町から降りしきる雪の中を千年の古都慶州へ向った。二月十四日の午前である。



美しい掛陵

慶州は「町の中に古墳がある」とも「古墳の中に町がある」とも云われる。今回、我々を迎えてくれたのは、白銀一色の慶州の町、きれいに雪化粧した新羅歴代の王達の円墳だった。その雪の王陵を幾つも見つめた。私のような浅学の者には、同じようにしか見えない半円形の王陵も高句麗様式の影響を受けたと思われるもの、十二支を下側面に配したもの、欄干を取り入れたものなど、王陵の編年について説明があった。又、その時代時代の新羅の国情を反映しているものもあるようだ。代々の王陵を順番に見るともっと変化がはっきり掴めるかもしれない。或いは写真を並べて見られたらいい

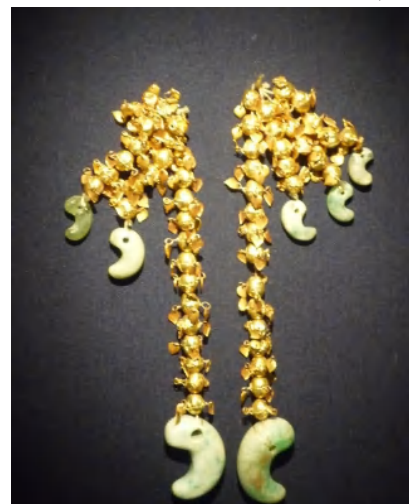
かも。

王陵側面の十二支の動物を見る時、自分の干支の前では教授を始め多くの人が念入りで見ている姿が、とてもほほえましい。

多くの王陵を見学した中で、最も美しく感動した王陵があった。新羅の第三十八代元聖王を祀った「掛陵」である。二月十五日朝、夜来の雪もあがり、朝から雲ひとつないまぶしいくらいの早春の日差し。静まり返った赤松林と雪帽子をかぶったソグド人などの石像の並ぶその奥に「掛陵」があった。純白な雪に気品さえ漂わせた美しさに、思わず見とれてしまった。しばし言葉もなく見入っていた。

教授さえ「ここには何度も来ているが、こんな素晴らしい雪の「掛陵」を見たのは初めてです」と、何度もカメラのシャッターを押しておられた。実際、この季節で普通の天気だったら、「最も完備された王陵」と云われるものの、枯れ草に蔽われた王陵しか目に映らなかつただろう。

慶州博物館では、歴代の王達を飾った黄金の王冠、耳飾などの装身具を数多く見ることができた。「黄金の新羅」と云われる所似である。広くユーラシアとの交流を示すガラス製品、宝剣、角杯などを見た。中には我が国の新潟県糸魚川で産出した翡翠(ひすい)の勾玉が金冠などを飾っている。



飾りについた勾玉

説明によれば、倭と新羅が平和的な友好関係にあったからこそ、王も王冠の飾りにつけていた。もし敵対関係にあったら、敵対国のものをつける筈がないとのことで、説明に説得力があり、十分納得できた。

どちらかと云えば、倭は百済とは友好的、新羅とは敵対的であるとの印象が強かったが、今回の新羅関連の講座や旅行を通して、今までの「新羅感」を改めねばと思った。この新羅シリーズの大きな収穫であった。

ついでながら、糸魚川産の翡翠の勾玉は、紀元前五千年、縄文中期から作られ始め、日本の各地や後に韓半島にも交易品として渡ったようだ。勾玉は曲玉とも書かれるが、動物の耳を形どったもの、或いは人間などの胎児を形どったものとも云われ、邪悪なものを追い払う魔除け、生命の根源を象徴するとも云われている。



勾玉がついた王冠

又、天馬塚などの木棺には、我が国の「高野槨」が使われている。恐らく吉野や和歌山の山で伐り出され筏にされて紀ノ川を下り、難波津、瀬戸内海を経て韓半島に渡ったものと思われる。和歌山市の古墳や紀ノ川流域には韓半島と係わり深いものが出土していると云う。きっと「高野槨」は交易品としてこの地域と新羅などと活発な交流をしていた証ではないだろうか。

今回の旅で、思わぬ再会の喜びがあったことも忘れられない。大邱で前にもふれた水崎林太郎翁の功績を称え、翁の墓を数々の困難、試練を乗り越えて守り続けておられる韓日親善交流会長、岐阜市名誉親善大使など沢山の肩書きをもって日韓交流の大きな一翼を担っておられる徐彰教さんとの

再会であった。

徐さんは何年か前、扶余でお会いしている。更にそれより前に「日韓市民グループ・なごや」の旅行で後藤団長から紹介されてお会いしているから今回で三回目。徐さんは記憶力のいい方で、二回目にお会いした時も私の名前、年齢を覚えておられた。徐さんは私と同年生まれであるが、私の方が三ヶ月程早く生まれている。それを知った徐さんは、彼の方が遥かに社会的地位が高いのに、儒教の精神に則ってか、いつも年長者として丁重に扱って頂くので、恐縮してしまう。



食事をする徐さんと伊藤さん

私にとって、韓国での知人と云える方は徐彰教さんしかいない。こんな立派な方と知己の間柄になれたのは、倫に「日韓市民ネットワーク・なごや」主催の韓国旅行に参加していたからである。

更にこの旅行には韓国の人よりも、韓国の歴史・文化に精通されていると云われている武井一先生を始め、旅行の都度、韓国の著名な考古学・古代史の教授が現地を案内して頂けるのも大きな魅力。今回でも朴夫秀教授のエネルギッシュな案内にただただ感服するのみであった。

今回の旅行は、慶州などで百年ぶりの大雪とも云われ、数十センチの積雪に見舞われた。そのため色々なハプニング想定外の事が起きた。ホテルまで坂道を登り下りしなければならなかったり、バスの前に立往生した乗用車を押し出したりもした。滑って転んで怪我をされた方もいた。でもその都度、朴天秀教授、武井先生、後藤団長の臨機応変な対応、スケジュールの変更などのお陰で大変ではあったが、格別思い出多い旅ができたことに感謝しています。

昨今この旅行のもう一つの楽しみになっているのは、おいしい韓国料理。こちらの

方でも武井先生、それと伊藤みつ子さんに心から御礼申し上げます。

最後になりましたが、この大雪の中での現地見学のため、急遽ゴム長靴を調達、“ゴム長靴先遣隊”を編成し、道なき道をラッセルさせるなど、後藤団長の先見性にも

脱帽。蛇足ですが、あのゴム長靴は二日目から水がしみてきてしまい、残念ながらバスの中においたまま、空港でお別れしてきました。「ゴム長靴くん、お疲れ様でした。カムサハムニダ」

松が枝の 春の雪散る 掛陵かな  
勾玉や 異郷の春を 主もなく



雪の慶州ロング



雪に埋まるバス



王陵軍



雪とバス

### 千載一遇、雪の慶州・・・・・・・・中林速雄

まず大邱で一泊した翌朝、窓のカーテンを開けてビックリ、一面真っ白で雪が降りしきっているではありませんか。1時間半遅れでスタートした 慶州中心の新羅紀行ですが、はじめは古墳公園の「大陵園」。一面の雪景色は絶景ですが、歩けばズブズブと足が潜り込みそうな積雪です。

ここで登場したのが「ラッセル隊」、ホテルにいるうちに手際よく購入した長靴数足を、団長を筆頭に、武井先生、鈴木、田口、大嶋、有賀の皆さんが、まず先行してくれます。その後ろを一行縦隊で皆が続きました。まさに雪中行軍の趣きです。このラッセル隊の活躍は天気が回復した翌日も、更にその翌日まで、雪が残った山間の史跡



深い雪をラッセルする人たち

で続きました。ありがたく後ろからついて歩いただけの気楽な会員に終始した私としては、皆さんに改めてお礼申します。また咄嗟に長靴を購入、メンバーの協力を得て十二分に活用した後藤団長の手際は、い



つだったか、足元の悪い山上の寺への往復に思い切ってタクシーをチャーター、その料金も安く抑えてみせた、あの記憶を甦らせました。なるほどこれぞリーダーと、感心し直したことです。

韓流歴史ドラマ「善徳女王」は、出発直前に大団円となる、まことにタイムリーな放送で、私も欠かさず観た一人だけに、その善徳女王稜やドラマでは金春秋の名で終始した武烈王の陵は、楽しみな見学でした。平地にある武烈王陵は、予定通り慶州1日目に見ましたが、翌日の予定に入っていた善徳女王稜は少し山間にあるので、少しは雪が減るかもしれない翌々日に延ばされました。そして時至り、松林の中の長い登り道をまだまだ雪中行軍よろしく粛々と辿ります。時々ドサッと枝の上の雪が落ちてきます。私は運良く一度も当たりませんでした。中には一度ならず直撃を受けた方もあったようで・・・でもその都度響く悲鳴が心なし楽しげにも聞こえた、といえば、何ですか、人の気も知らないで！と叱られるでしょうね。

松林が左右に後退し、白一色の広い芝生が広がる先に、高さ6.8メートル、直径24メートルの墳丘墓が目に入ってきました。その美しいこと・・・どの王陵も真っ白な墳丘ですから、とりたててこの女王稜だけが美しいわけではないのですが、鼻屑目とは面白いものです。

そこで腰折れ一句献上

**青山に 眠る女王の 雪化粧 まいく**  
念の為注釈すると、辞書によれば、「青山」は「墳墓」の意ですが、それが丘の形をした朝鮮式土饅頭を指すのはムリかもしれません。ただ、今度も読み直して参考にした司馬遼太郎の「街道をゆく(2)韓のくに紀行」の「七人の翁」で、慶州に多い墳丘墓を青山と表現しているの、ちょっと真似ました。雪で道が通れず、海岸の前に横たわる岩場が墓石という珍しい文武大王海中王陵に行けなかったのは残念でしたが、その代わり予定にはなかった金庾信(キムユシン)の墓に行くことが出来ました。ここは廟と呼ばれ、立派な門から石畳の参道が墓前まで続いています。素人目にはどの王陵よりも規模が大きく見えました。



善徳女王陵

ドラマでは善徳女王がトンマンの名で呼ばれていた苦難の時代、愛し合いながらも臣下の道を選び、その亡き後、武烈王となった春秋を補佐して三国統一を成し遂げていった金庾信は、関羽のように「廟」に祭られる英雄だったんですね。もっとも、その陵墓の築造は没後100年以上経ってからと、武井先生の著書「慶州で2000年を歩く」にある通り、本当に庾信の墓だった所に陵墓として築造したものかどうかは分からないそうです。でも可笑しかったのは、墓碑が二つ並んでいて、左は「大角干金庾信墓」右は「開国公純忠壯烈興武王陵」とあります。



金庾信の陵

もちろん王号は後世贈られたものでしょうが、熱烈な庾信信奉者の気持の表れだろうと、微笑ましく感じました。

雪中行軍は、今は懐かしい経験となりましたが、渦中であってはいささか難儀なものでした。雪や氷に滑って、大きな事故では手首の骨折があり、腰を打ったり顔面を打ちつけたりと、周りも大丈夫かと心配する事故が散発しました。誰かが冗談に「黄金の新羅残影紀行」じゃなく「白雪の新羅無残紀行」になりませんようにと漏らしましたが、骨折は治療が適切だったのと、ケガも後を引いて悩まされるほどではなく済んだことで、予定通りセントレアに戻った後、全員元気な顔を揃えて解散出来たのはなによりでした。

「伽耶」「百濟」と近況報告してきた大阪の兄から、「新羅」の報告を読んで、こんな感想が届きました。「そういえば、我々が住んだ慶尚南道では全くといって

いほど雪が降らなかったから、それはいい経験をしたな。」

全くその通り、千載一遇の機会だったと思います。お世話くださった皆さん、もう一度ありがとうございました。



金庚信（左）と善徳女王陵右）の標識



大陵園の古墳



慶州の夕景

「善徳女王」は、韓国5千年歴史上初めて女王で王位についた新羅第27代・善徳女王の物語。新羅千年歴史の中で最も燦爛だった時代をドラマを通じて再照明され、女王の不屈の精神と勇気を描きます。ドラマ「善徳女王」ロケ地となった「新羅ミレニアムパーク」内にはミスル宮と花朗演武場、金・ユシン山菜などがあります。もう新たな観光名所になったドラマ撮影地・新羅ミレニアムパークを訪れます。引き続き、芬皇寺と、ベ・ヨンジュンさんの本「韓国の美をたどる旅」に紹介された皇龍寺址、東洋最古の天文台である瞻星台、善徳女王陵、国立慶州博物館などの善徳女王の痕跡をたどり、当日の面影と栄華を偲びます。（善徳女王ツアーの紹介文）

### あゝ善徳女王・・・山本玲子

伽耶紀行の時より少し細くなられた朴教授の新羅研修旅行は、予想通り意欲的かつ濃密で50年ぶりという大雪も加わり、忘れられないものになりました。

たくさんの王陵を見ましたが、なんといっても伽耶を従属させ、三国統一の基礎を築いた女王であり、KNTVで毎週楽しみに見ていたドラマの主人公、善徳女王の陵が一番印象に残りました。威勢を示す大きさも然る事ながら、半円の丸みが他の王陵とは違い、とても緩やかでした。その雪をまとった陵は、この上ない春日に美しく輝き、彼女の心の中の憂悶や辛苦を優しく浄化しているように思えてなりませんでした。



金庚信（キム・ユシン）の墓と人々

生前の善徳女王は宿敵、百濟との国家の存亡をかけた戦いを進める一方で、九層の巨大な木塔を持つ皇龍寺や東洋最古の天文

台という瞻星台を完成させました。天体観測から得られた情報は、気象の予測、農耕の暦、国家の行事の展開等に役立ったといわれています。私はドラマを見ながら7世紀の韓半島に、このような女王が誕生し、軍事、政治、文化各方面に大きな力を振ったという事実に感動したことを思い出しました。



擔星台の風景

女王の姉の子供で、新羅の使節として大和を訪れたこともある金春秋（後の武烈王）の陵も訪れました。ドラマの中ではやや柔弱そうな青年王族として登場していました

が、事実は大和や高句麗、そして唐を相手にそれぞれ政治工作を行い、最後には唐を味方に引き込んで百濟、高句麗を滅亡に追い込んだ大人物だったようです。

また、ドラマ「善徳女王」で女王の少女時代からの心の恋人として扱われていた勇将、金庚信（キム・ユシン）の陵も見ることができました。彼、キム・ユシンは生涯、善徳女王の傍らにあって新羅の領土拡大に死力を尽くしますが、元来は古代日本とも関係が深かった伽耶の王族の末裔でした。

ドラマに登場した人々の陵を訪れる度に、私は雪のスクリーンの上に、かつてドラマで見た様々な場面を思い描いていました。さらに、彼ら彼女らの一人一人が海の彼方にある国「倭」を強く意識して行動していたことを知り、想像をはるかに越えて、古代日本と古代朝鮮が深い係わりを持っていたことに心うたれました。

#### 千年の都、慶州を歩いて・・・朝倉恭子

50年振りの大雪の中、ラッセル部隊の大活躍でスムーズに歩みを進めることができ大助かり、ありがとうございました。

散策を楽しむお天気ではなかったが、慶州の中心地の大陵園では、静けさの中に厳かな雰囲気のある味鄒王陵、苑内最大の皇南大塚双円墳、積石内部が見てとれた天馬塚など多くの巨大積石木槨墳が集中的に築造されていた。当時、日本でも応神、仁徳陵などの巨大前方後円墳が築かれており、どこか二つの国が共鳴しているように思えて何となく親しみを覚えた。慶州の古墳群は、その積石木槨造りが幸いして、数多くの古墳が盗掘を免れ、おかげで当時の豪華な副葬品の数々を、慶州博物館で目にする事ができた。

おびただしい金製品には目が釘づけとなるし、金冠飾りのヒスイ製勾玉については「倭国越(こし)産出のヒスイで、それも新羅製ではなく、あけられた穴の大きさから倭国で作られたと考えられる。また、金冠に飾られたものであるから当時倭国と新羅が全くの敵対関係にあったとは到底考えられない」との朴先生のお話に赤ベコ状態となった。

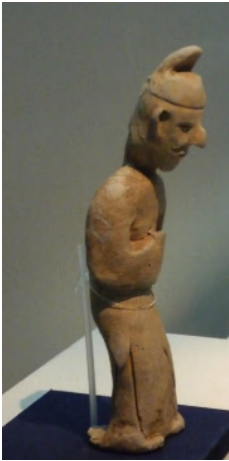
そして対朝鮮半島で言えば「越」は倭の



勾玉いろいろ

表玄関であり、新羅との間で文化や交易上の交流が想像以上にあったのだろうと改めて思った。また、ガラス珠付首飾り、瑠璃杯、角杯、西域人(ソグド人?)らしき土俑の展示物に加えて、掛陵にあった武人石像のペルシャ風顔立ちなどから4C~6C半頃の新羅と西域との深い交流があっただろうことも、うかがい知ることができた。

さて、今回の訪問先で、私的ナンバーワンは塔谷磨崖仏です(大雪の中、よくぞ来られたと仏様が言うておられたような・・・) 全体像がつかめなかった王陵は選外ですが、真綿にくるまれたような「心地よさ」を感じたのは私だけではないことでしょう。



土人形グループ

雪とまがい仏

### 「黄金の新羅残影紀行」に参加して・・・・在野一生

今回の新羅研修は、内容の濃い事前講義を数回受けてから現地の史跡めぐりを行うという形式で実施されるようになってから三回目を迎えるとのことでした。この研修で一番必要な力は・・・日韓交流史フォーラムとかけて、商売繁盛と解く。そのココロは、「きゃく力」です。

ですが、これまで同様現地土産を買う余裕もない大変密度の濃いものでしたが、成功裏に終わったのは、後藤さんはじめ幹部の方々のご尽力と、参加メンバー諸子の高い意識、知的好奇心そしてご自慢の脚力のなせる技といえましょう。

天候は、古代史を学んでいる当会にふさわしく、一生に一度経験できるか否かというほどのまさに「歴史的」大雪に恵まれました。これは、皆さんの熱心な活動に対する天の祝福だと私は感じました。吹雪後における世界遺産全体を包む雪景色の崇高さは、誰よりも多く写真を撮影された朴天秀先生の行動が証明していたと思います。



雪の中の朴教授（陵の横）

最初に行われた加耶研修における朴天秀先生の猪突的脚力はうわさには聞いていましたが、あの横殴りの吹雪を物ともせず古墳に向かって邁（猛）進される姿を見て、さもありなんと感じました。情熱と行動力とあの「脚力」こそが考古学には不可欠のだと実感した次第です。二回目の百濟研修では、かなり勾配の厳しい山城へ行きましたが、齢八十超の会員が杖をつきながら休まず登る姿に、その方の脚力だけでなく、これまでの来し方＝人生が目に見え心で感銘しました。

今回の新羅研修も日程表を見れば一目瞭然



雪の中の朴教授

さて、本題の研修についてですが、以前申し述べましたように、尾張平野における加耶及び同族を併合した新羅人の痕跡を色濃く感じている関係で、今回の研修は大いに興味を抱きながら臨みました。そして、重要な疑問を解くことができ、また新たな発

見や諸々の収穫もありました。以下要点を記します。

まず最初に、なぜ新羅（そして大和）に見事なローマングラスなどの優れた西欧文物が豊富にあるかという点です。

新羅は、周囲が敵ばかりであったのにどこから宝物を得たのだろうかと思いましたが、その謎は王墓周辺に建てられていたソグド人石像に関する朴天秀先生の解説で見事に解けました。



雪をかぶるソグド人石像

ソグド人は、紀元前4世紀頃には今日のアフガニスタンの北方に位置していて、アレキサンダー大王傘下に入ってヘレニズム文化の母体となった部族です。この頃からすでに交易に長けていたようですが、時代が下って前漢武帝（前1世紀）頃には、シルクロード東西交易の中核を担っていたといわれています。国同士が対立していても商人は比較的自由に往来していたということです。王陵傍らに配置された文官、武官石像とともにソグド人の石像があるという事は、朴先生の言われたとおり、新羅におけるその社会的立場の重要性と、文化伝搬者としての歴史的な役割の大きさを物語っていると感じました。彼らは、きっと日本へも来ていたことでしょう。なお、新羅の交易品は、多分当時における一流技術で作られた須恵器ではなかったのでしょうか？そして、それは新羅に併合された加耶族職人達の技術が生かされたのではないだろうかとの思いがよぎりました。

次に、新羅特有の積石木槨墓です。これ

は、朴先生の説明にもあったように北方遊牧民の伝統的墓制ですが、私は、かねてから鴨緑江沿岸にある松岩（ソンアム）や雲坪（ウンピョン）の高句麗積石塚との関係がとても気になっていました。当該積石塚は、無基壇→複数基壇→石室封土墳（5C）と発展していきました。朴先生に「高句麗埋葬文化の影響が大きいと考えていいですか？」とお尋ねしたら「否定できない」とのことでした。新羅の元となる辰韓（斯羅国）は、馬韓王が秦の亡命者を配したという歴史的記述がありますが、そればかりでなく当時から後の高句麗系文化を持った東扶余、卒本扶余系の人々も住んでいたに違いないと感じました。また、新羅の古墳がほとんど盛土円墳であることから、新羅の墓制は、単純ですが高句麗系の積石文化+加耶系の盛土文化墓制が融合したのではとの印象を持ちました。

なお、新羅王にはしばしば「干」という尊称が付いていますが、これはチンギス「汗」に通じる遊牧族の王号であると思います。会員の鄭氏によれば初代赫居世は「東明」という意味を持つこと、北扶余王称「解」姓が王族に登場すること、朝鮮の語源となった壇君朝鮮の都「アサダル」に通じる「阿達羅王」の存在などから、新羅王族に北方遊牧（扶余）色を私は強く感じます。



西域から来た宝剣

続いて、金冠塚や天馬塚で出土した王冠のヒスイです。朴先生の説明によれば、石の素材や加工技術から判断して糸魚川産のものであると断定されました。王冠の装飾に利用したということは、先生の指摘どおり、少なくとも6世紀における新羅と日本は、とても深い友好関係にあったことを物語っていると思いました。今日、関係者の間でよく指摘されているように、日本書紀はと

ても百済色が濃く、非百済—新羅、高句麗、加耶の歴史が脚色、潤色されていることを思えば、この王冠のヒスイを出発点として、今後列島と半島に関する真の古代像が浮かび上がってくると思います。



ローマングラスの数々

そして、善徳女王の下で活躍したキムユシン墓横にあった石碑に「太角干」とその役職が記してあったのが私には印象的でした。「角干」は新羅の一等官ですが、それに「太」がついていますから「新羅国歴史上最高の宰相」という意味でしょう。

ところで、福井県敦賀市にはその地名呼称元となった古事があります。日本書紀(巻第六)垂仁紀に登場する「都怒我阿羅斯等」伝承です。額に「角」がある人が来たから「角鹿(つぬが)」と名付けたとあります。彼は通説では大伽羅(金官加耶)王子とされています。しかし、これは私の直感ですが、ユシンが金官加耶王族の末裔であることを念頭におけば、「都怒我」は「角干」、「阿羅」は金官加耶のすぐ近くにあった「安羅加耶」のことで、「都怒我阿

羅斯等」とは即ち、「安羅加耶王子で同国の宰相」を意味するのではないかとの印象をも持ちました。

最後に、今回鄭会員にバスで隣席していただき、なかなか聞けない生の朝鮮現代史～古代史まで生きた歴史の勉強をさせていただくことができました。紙面をお借りしてお礼申し上げたいと思います。なお、車中でご説明いただきました肅慎から扶余、高句麗、朝鮮古代を説き起こした朝鮮作家の本は、大変歴史的に意義深い内容を含んでいますので、是非とも翻訳出版していただきたいと思います。



雪の中の寺(美しい雪景色)

まだまだ書きたいことや、楽しい思い出が山ほどあるのですが、紙面の関係上心に留めつつ以上にしたいと思います。

毎回大変中身の濃い研修なので、秋に実施予定の魏志倭人伝にまつわる北九州方面の企画も大いに期待しています。その節はまた皆さんにご親交いただければ幸いです。

## 白い色の新羅・・・・・・瀬川照子

新羅は訪問してみると低めの山に岩が多い。石造物や技術の高さに魅せられた彫刻、聖なる天馬(ペガサス)の塚などからは中央アジアや西域の文化の影響も強いと感じさせられた。

十年前他界した師・井上女史はそのむさぼり読む蔵書から紀元前のエジプトのヒクソス、メソポタミヤのカッシート、シュメール、ドーラ・ビッダなど古代にすでに日本に入りこんでいると言っていた。当時『おかしいことを話す』と言われ涙を浮かべていた。

慶州の王墓の石人像にユーラシアを歩き来した商人・ソグド人顔を見た時、逢いた



手をあげる朴教授

くてたまらない人に出会ったような喜びが沸いた。天馬塚の金冠は関西の古墳に類似したものがあり、アフガン近くの遺跡からも出土している。シルクロード商人の逞しさとか強かさぶりに驚かされる。

朴先生の糸魚川の翡翠が取り持つ両国の関係の力説振りに胸が熱くなった。精力的によく動かれる。ラッセル隊の踏み込んでない膝までの新雪の中に入込み最後尾で写真を撮り終え翻るように瞬く間に先頭陣に加わっている。若さとはこのことか、両国を結ぶ貴重な存在。この朴という姓が各務原の大名の墓石の家族の中に刻まれているものを見かけた。近江にも名を変え日本人になった人がいる。

二日目突然の大雪。一、五時間遅れて車中の人になられたが「遅れてすみません」とか言われぬ・・・。あっそうだこの国は儒教の文化の息づく、しかもこの旅の先生上下関係の礼儀を重んじる国家、当たり前のことと理解。「大変でしたね」一人前の席に残られ座しているのを見かけ声掛けをして下車。両肩をすぼめ（見えた）てうなずかれた。「言葉ではなく体がすまないと言っている」と思えた。異文化を知り理解し合うことの大切さを学んだ。



3日目の夕食メニュー

三日目の夕食は魚、特に刺身は新鮮で美味かった。千切りの刺身に梨やりんご、生野菜を混ぜ合わせ食する。珍食。夏場真似ようと思った。

大盤振る舞いのアルコールたっぷりの楽しい晩餐は瞬く間に終り、今まさに出て行くこうとしている最中、朴先生の「もったいない」と二・三ど繰り返しの指の先は、秋刀魚の半生を食べる浦項クアメギのこと。大変手の掛かるこの土地でこの季節だけの物のようでその貴重さと、慣れれば大変美味なものと思うようになる食材。

現に一〇切れ目にアミノ酸の旨みともちっとした感触がたまらなく美味しいとおもい出したがもう満腹で私も「もったいない」と、背にした。もちっと同行者で豊富な知識をお持ちの方々の会話が自然に耳に入り、結露で窓外の景色がみれなくても受講しているようで満たされた。三日間雪の新羅を巡る。



スキー場を思い出した古墳群

白い古墳は天空高く見えた。

十八年の南国育ちが初めてのスキーで雪景色の虜になり、毎冬休みスキーに熱中して一級を取り、『スキー場に親戚の民宿がある』人を紹介され一生滑れると岐阜に嫁いできたが二日間行ったきり。ラッセル隊が新雪を踏む雪の軋み音。松林のかぶる雪がどっと降り散る様。太陽に白く輝く景色。スキー場を駆け巡っていた頃を思い出させる「最大の贈り物」だった。

昨年大の歴史好きの末弟と父母亡き後の支えだった兄夫婦が他界した。現実逃避の読書三昧は運動不足により肥満を加速させその上両膝が歩数ほど痛む状態が生じた。A氏に「ハードな旅、足を鍛えておくように」と。這ってでも行きたい。日々思いが募る。同行者の足手まといにならないためにと連れに頼み込んでの二人参加。日本の棲家では滴程度のアルコールが全開のため急ピッチで体内に流し込む。予想通りホテルに戻るや即塾睡。ワンサイクルはどうしても醒めてくれない。それからの入浴、それが長い。頑丈そうなA氏が「三日目足が腫上がって」の言葉が脳裏から離れず、明日のためどうしても足を揉んで貰いたいと思うあまり、連日寝不足。そうこうしているうち膝痛も消失。雪道歩きが筋トレになっていた。「黄金の旅」企画・実行の役員の方々に感謝。

## ハードでも楽しかった！ 李 純子

寒いのは覚悟していましたが 50 年ぶりの雪には閉口しました。にもかかわらず朴天秀先生のあいかわらずの ハードスケジュール・・・疲れました！

少し平均年齢を考えて下さいとお願い申し上げます。

しかし、おかげ様で、このところ 韓国の歴史が少しずつ解るようになりました。本屋に行くと韓国に関する本にすぐ目が行くようになったのが自分でも 不思議です。

韓国籍であっても 日本の義務教育を受けた私は 日本と韓国両方の歴史を、ほとんど知らずに来てしまいました。年をとるにつれ自分のルーツを知りたくなるものなんですね。そのタイミングで後藤さんと知り合いすぐ伽耶紀行にも連れてってもらいました。その後、百濟紀行そして今度の新羅紀行と 3 回目になりますと少し凶々しくなり 色んな方の事 お名前も解るようになり 皆様にも可愛がって頂き、本当に感謝に堪えません。高橋さんの骨折、松尾さんの奥様の体調不良もありましたが、お二人とも気丈に振る舞われ、行程をこなす事が出たかつての先生の体を支え続けていた後藤さんと高橋さんの師弟愛？も心和ませて頂きました。また王陵の森から夕日を見て、涙されていた山本玲子さんの優しさにも心打たれました。色々な方と旅をするって 教室では解らない事が一杯解って良いですね。秋の対馬 壱岐の旅も 楽しみにしています。



食事をする李さんたち

## 雪とヒスイと鉄、または携帯電話・・・武井 一

今回の旅行は週間予報が外れて、韓国で气象台開設以来の大雪の中で行われました。雪はシンシンと降り続いたため、当初の日程とは大幅な変更せざるを得なかったのですが、それでも 8 割方は回ることが出来ました。

行程のほとんどは朴天秀先生の解説で行われました。新羅の王陵を中心に説明していただき、立地の変遷、構造の変遷、唐の墓制や仏教の影響など、広範囲にわたる話をしてくださいました。それとともに日本と新羅の関係をつねに意識して話されていました。それは、ヒスイです。新羅の王陵から新潟糸魚川産のヒスイ、それも倭で加工されたものが出てくるのです。

5 世紀頃、日本のヒスイが緑から白いものに代わるが、5 世紀頃の新羅の王陵から出てくるヒスイも同じように緑から白に変わること。この頃日本の古墳からも新羅系の遺物が出る。このことは新羅と日本の王家の繋がりがあったことを示しているのですが、それは、400 年の高句麗による戦

争で金官伽耶が弱体化したため、日本が新羅に金や鉄を求めたことと、新羅も威信材としてヒスイを日本に求めたことが関係するのだろうと説明していました。



視線を浴びるヒスイ付王冠

日本書紀では新羅のイメージは悪く書かれているのですが、それは日本書紀が書かれた頃の政治状況を反映しているのだらうとされます。そして、ヒスイを追うことで、政治的関係の変化はあっても、双方の関係



は続いたとされました。というのも8世紀に創建された仏国寺の石塔からも出てくるからです。

このようにヒスイ、鉄(金)を軸に日本と新羅の繋がりをダイナミックに説明していただいた訳です。一昨年の伽耶紀行のときも、昨年の百済紀行でも、倭側が一貫して鉄を求めて様々な国と接近したこと、韓国側も日本の軍事力を必要としたことがテーマとなっていました。分裂していた朝鮮半島に対して、日本がすでに大和政権との関係で結びつきが強くなっていたこと。そのために統一した軍事力を使える状態になっていて、鉄さえ手に入り武器が作れば強力な軍事力を持てるからです。そんなわけで、3年続いて鉄と軍事力がテーマになりました。

さて、大雪で大変な旅行ではありましたが、思わぬメリットもありました。まず、普段遭遇することのない景色を見られたことです。話には聞いた雪の慶州を堪能できたことです。



武烈王陵の前の亀

また、石像物にうっすら積もった雪が、それを立体的に見せたということもあります。武烈王陵の前の亀の「亀」は足のしわなどが写實的に彫られていて生命観溢れるものですが、そのしわの様子が、雪のおかげで、かえってメリハリよく見えていました。また雪の疲労感のおかげで食事の美味しかったこと。慶州の名物を堪能することが出来ました。

最後に寄った釜山の甑山公園では日本の携帯電話でもアンテナマークが立っていました。

残念ながら雨で対馬は見えなかったのですが、確実に対馬が近いことが分かりました。次回の対馬、壱岐紀行ではぜひ対馬側から韓国を見たいものです。



吹雪の中陵に向かう人々

## 서울 소식



## ソウル便り

旧正月は、いかがでしたか

韓国ソウル在住 会員：坂野 慎治  
(梨花女子大学・通訳翻訳大学院講師)

ご存知のように、韓国は陽暦と陰暦で二度、新年を迎えます。陽暦の正月は暦の上では節目になりますが、「ソル」と呼ばれる旧正月の方が重要な年中行事です。親戚が集まり、皆で食べられるだけのお供え物を作って先祖を祭る、宗教的な意味合いの大きな行事だからです。そのため旧正月の連休は、ただ楽しいだけではありません。20～40 歳代の会社員を対象に「嫌いな日」を調査したアンケートで、堂々の(?) 1位になったのが「旧正月・旧盆」(25%) でした。理由は「肉体的にも精神的にもストレスを受けるから」だそうです。では、そのストレスの原因とは何でしょうか。こちらは年齢不問で行ったアンケートの結果で、1位は「親戚の話」(40%)、2位は「帰省の交通渋滞」(19%)、3位は「料理など家事」(18%) でした。「親戚の話」は男女共に1位で、具体的には「結婚や就職、昇進の話」、「顔など容姿の話」、「親戚との比較」などです。



설날

韓国では一般的に日本よりも単刀直入・プライベートな質問が多いので、親しい親戚同士なら推して知るべしでしょう。さらにストレスの原因を男女別に見ますと、男性では2位が「帰省の交通渋滞」(30%)、女性では2位が「料理など家事」(33%) と、それぞれの役割が表れています。こうした特徴は、去年の旧盆の期間(9日間)にコンビニエンスストアで普段よりよく売れた商品にも表れています。売り上げが伸びた商品のうち、ウイスキー(70%増)、二日酔い解消ドリンク(123%増)は主に男性が購入しました。ゴム手袋など家事の道具(87%増)、唐辛子味噌など調味料(49%増)、雙和湯(滋養強壯剤、154%増)は、主に女性が購入者でした。変わったところでは、サイバーマネー(260%増)もありました。こうした商品から想像できる家族の姿は、お父さんはお酒を飲んで二日酔い、お母さんは料理と後片付けに追われ、子供はサイバーマネーでパソコンゲームといったところでしょうか。以前はこうした男女の役割が当然のように受け止められていましたが、最近では「名節(旧正月・旧盆)症候群」の原因になっています。



추석 秋夕

女性は「連休中、料理や後片付けに追われているのに、何もしない夫を見ると憎らしい」ということで、家事による肉体的・精神的なストレスがピークに達します。男性も長時間の運転に、妻の小言、妻と姑とのいさかいなど、肉体的にも精神的にも苦勞が絶えません。また、旧正月にはこうした男女の役割だけでなく、宗教的な問題も表面化します。これは、今年1月にあった裁判です。儒教的な伝統の強い仏教信者の家庭で育った夫と、牧師の娘として育った妻。結婚して娘をもうけましたが、ある年の旧正月にトラブルが起きました。夫が「祭祀のために宗家に行こう」と言うと、妻は「教会に行く」と聞き入れません。夫の母も「祭祀はしなくてもいいから、挨拶だけでも」と説得しましたが、妻が「これから祭祀には絶対に行かない」と言うので、夫の母は「それなら出て行け」と…。結局、夫が離婚と養育権について訴訟を起こし、裁判所は「2人は離婚して、妻は娘が成人するまで毎月30万ウォンの養育費を支払うこと」と判決を下しました。最近では旧正月・旧盆の連休に海外旅行に出かける人が増えるなど、習慣に変化が表れています。そうした過渡期だからこそ、多様化した価値観によって問題が起こっているのかもしれない。

黄金の新羅 俳句の部



四面石仏

伊藤みづ子

寿城池の灌漑の碑や月朧  
目覚むれば一面の雪韓紀行  
淡雪に四面石仏の衣紋浮く  
山腹に新羅王陵雪解風  
激戦の兄山江や雪残る



雪しまく

山本玲子

浅春や新羅石塔古色帯び  
女王陵覆ふ春雪虹色に  
雪しまくホワイトアウトの王陵址  
十二支像の着衣の髪に雪解凍  
ラッセルの長ぐつ跡を踏み締むる



春宵

まよひつあきつ

倭の翡翠混じる金冠冴え返る  
春雪に埋もるる方墳王墓かな  
ホテルの軒輝きあたり氷柱群  
春雪を踏みしめ進む王墓かな  
春宵やマッコリ交はし旅終はる



春吹雪

高橋孝子

朴教授と仰ぐ王陵春吹雪

王陵へ春のどか雪膝で分け

春雪を払ひて入れり天馬塚

武烈陵ひときは激し春吹雪

王陵に鳥の声なし雪解風

## 感謝감사

年末年始に篤志の方々から寄付を頂きました。  
年末に匿名の方から10万円、年始には春日井の  
鄭禧昇さんから5万円の寄付がありました。  
おかげさまで会創立14年目も余裕を持って  
スタートできそうです。

心から感謝申し上げます。



### 編集後記 (2011/03/13)

アンニョンハシムニカ? 今年に入って最初の会報です。

新羅残影紀行に参加の会員の皆さんお帰りなさい。  
ご年配にもかかわらず皆さんのエネルギーな行動力と探究心  
には感服するばかりです。

今の日本の若い人たちにそのエネルギーを分けてやりたいですね。  
特に男子の行動力や覇気の無さに歯がゆいばかりです。このよう  
な現象はいろいろなことが原因になっていると思いますが、草食

系男子とか内向き思考さらに留学しない若者たちなどの話を聞くと日本の将来が思いやられます。

私事ですが我が会の名誉顧問の鄭煥麒さんが毎月開かれる勉強会に時々、参加させていただいていますが、その中に愛知県高校学校文化連盟の会長をなさっていた金谷鎬二さんと「トイレ清掃の教育的意義」について意気投合し「NPO 法人トイレ教育から国づくり人づくり」という会を金谷先生に代表理事になっていただき今年に入って立ち上げました。

トイレには\*感謝の心を知る力\*道徳心を養う力\*人の優しさを知る力\*心を磨く力など意味深い力があります。現在、教育関係に携わっている多くの諸先生方が中心となつてすでに10人の理事と多くの会員の皆様が参加してくださっています。

これからもこの会同様に皆様方のご理解とご協力をいただきながら NPO 活動を推進して社会貢献に力を注いでいくつもりです。

編集長&ホームページ管理者 中川 修介

Mail:webmaster@nikkannet.jp

